

# 無量壽

第五号 (平成二十四年秋号)  
発行 雲夢山壽命寺

十月二十七日、二十八日

## 報恩講



今年も報恩講の季節がやって来ました。報恩講とは、生涯をかけて私達にお念仏のみ教えをお示し下さった宗祖・親鸞聖人への感謝の心から勤められる法要で、門徒にとつて一年で最も大切な行事です。

本山・西本願寺では「御正忌報恩講」として毎年一月九日から聖人の祥月命日である十六日まで八日間に渡り勤められますが、全国的一般寺院やご門徒の各家庭では、大体、秋の収穫が終わる頃から冬が始まるまでの間に勤めることになっていきます。これは、門徒たるものは皆、一月は京都に上がって本山の報恩講にお参りさせていただくものであるか

ら、各々の報恩講はそれぞれに済ませておくべし、との考えから来た習わしであると聞いています。

ですから、この時期日本全国を見渡せば、必ず毎週どこかで報恩講が勤められているはず。きつと壽命寺で報恩講を勤めているその同時に、同じようにして勤められている報恩講もあることでしょう。

一つ一つの報恩講は地域のさやかな行事に過ぎないかもしれませんが、でもそれらが親鸞聖人への報恩という同じ心の元、全国各地で(あるいは海外でも)同時多発的に行われている営みであるということから

見れば、これは西洋のクリスマスに匹敵するような、一大宗教イベントとしての様相を呈してきます。

このことを思う時、私は大小様々な模様の布が縫い合わされた大きなパッチワークをイメージします。それぞれのお寺やご家庭の報恩講は一枚の布です。そしてそれが親鸞聖人への感謝の気持ちという一本の糸で縫い合わされて、大きくて味わい深い柄をもった一枚の布となるのです。お正月の頃、その真ん中にはまだ大きなスペースが残っています。そこには本山御正忌報恩講の布が収まる寸法というわけです。

どうでしょう?こんな風に考えるとワクワクしてくるのは私だけでしょうか。これから迎える報恩講は、日本全国にとどまらず、世界各地の御同朋・御同行(おんどうぼう・おんどうぎょう)と連なる集いであるというイメージをもって、心をこめて賑々しく勤めさせていたいただきたい。別紙ご案内の通りとり行いますので、皆様お誘い合わせの上、是非ともお参りください。

### 【ご講師の紹介】

赤井智頭(あかいちけん) 師

本願寺派布教使/兵庫県西宮市善教寺所属。本山の教学研究所の研究員をされており、本山からの出版物にも法話を寄せるなどされています。昭和五十五年生まれの三十二歳。若い感覚で柔軟で分かりやすいお話くださることと思います。しつかりと聴聞させていただきましょう。

### ●ご家庭でも報恩講を勤めましょう●

報恩講は門徒にとって1年で最も大切な行事です。各ご家庭の御内仏でも必ず勤めましょう。昔は親戚やご近所を招いて勤めましたが、ご家族や身近な方だけの集まりでも結構です。荘厳も蠟燭を赤に替えてきれいに整える以外特別な事は不要です。住職を呼んで頂いても結構ですし、ご自分たちだけで読経しても構いません。親しい人と一緒に正信偈を心を込めて勤めましょう。不明なことは遠慮なく住職まで。

# そんなかとか人間のものさし うそかまことか佛さまのものさし

相田みつをさんの詩です。

そんなかとか人間のものさし。私たちは毎朝目覚めた瞬間から様々なことを考えます。今日は何を着て、何を食べて、誰と何処へ行って何をしよう。内容は何であれその時々において自分に一番都合がいいものを選んでいくはず。もちろん誰かの為に施したり犠牲を払うことも時にあります。でもそれも周囲の評判や将来的な利の還元など、最終的には自分の得になるという思惑がどこかに潜んでいるではありませんか？

いささか意地悪な物言いだ恐縮ですが、自分の都合の善し悪しで物事を判断する事自体は、生物の生存本能ですから否定されることはありません。ただ厄介なのは、私たちがこの「都合の善し悪し」ということから「都合」という言葉を消して、自分は「善悪」の基準に立って物事を判断していることと錯覚してしまうことです。

例えば私たちはよく「あの人は善い人だ」などと簡単に口にしますが、同じ人が自分の利に反する事をするとき「あんな人だと思わなかった」と言います。一体どんな基準で善悪を決めているのでしょうか。自分の都合と善悪を思い違

えている典型です。法律や道徳に照らして善悪を判断することもあるでしょう。でもそれらもなるべく多数の人々の都合に合うよう、最大公約数でまとめられているものにはすぎませんから、本質的・普遍的な意味での善悪ではないはず。

私たちが自分の都合で判断しているという事実を忘れ、自分は正しく物事を判断していると思いつ込んでいくのは、色眼鏡をかけて見た色を本当の色と思いつ込んでしまうようなものです。しかもその色眼鏡は人によって色が違うというわけですから、人間のものさしとは何とも心もとないものです。

仏教では、私たちがこんなふうにして物事の本質を見誤ってしまうところにこそ、苦しみや悩みの始まりがあると説かれます。そして本質を見誤らせる色眼鏡を取り去り、この世界のありのままをありのまま見る事ができるようになれば、苦しみは滅せられるとされます。その状態が悟りであり、それを体得した存在を仏と呼ぶのです。「うそかまことか佛さまのものさし」とはそういう意味です。

最近日本は「島」を巡って隣国ともめています。互いがこれは自国の領土

だと歴史的根拠を示してはその正当性を主張していますが、これなどはお互いが人間のものさしを振りかざしている典型です。佛さまのものさしから言えば、島は日本領でも中国領でも韓国領でもありません。ただそこに島があるだけです。

自分の都合に従って行動するのは生き物として当然のことだし、国家が国民の都合を取りまとして代弁するものなら、領土の所有を主張するのも必要なことです。対立が起こるのもある程度は致し方ないでしょう。でもその上で、これはお互いが自分たちの都合を主張しているに過ぎないという事も忘れてはならないと思うのです。それを忘れると、いつしか対立はそもその原因を離れ、お互いが相手の存在その

ものを悪と見なすような愚かなスバイラルに陥ってしまうからです。テレビやインターネットで人々の言説を見聞きしていると、すでにそういう状況に陥っているのではないかと感じます。言うまでもなく私たちは佛さまではなく人間ですから、佛さまのものさしを使うことはできません。でも佛さまの教えを聞かせていただく中で、自分のものさしのいい加減さに気づかせていただくことはできます。悲しいかな、死ぬまでそのものさしを手放すことはできませんが、振りかざすのはやめられるはず。どちらが先かなどと言っている場合ではないでしょう。「南無阿彌陀仏」と念仏をさせて頂いている私

が、率先して振りかざした手を下ろしたいと思えます。合掌

## 寄進のご披露

平成23年1月から平成24年10月にあったご寄進は下記の通りです。この他にも懇志やお賽銭、お供え、その他清掃活動奉仕など、有形無形様々な尊い御志を頂いています。厚く御礼申し上げます。

### 【永代経懇志】

平成23年

●釋浄教(傍島公男)「本堂座布団60帖」

●慶喜院釋良敏(三上端子)「金式百萬円」

### 【特別寄進】

平成23年

●佐野武宏・美智子「内陣・余間卓敷物一式」

●池見滋嗣・杉田守「五条袈裟一領、色衣三枚」

●伊藤庄蔵・敦子「ストーブ一台、夏座布団5帖」

平成24年

●杉田守「袖垣」

●古川陽朗「色衣2枚、黒衣1枚」

●古川重雄「向拝手摺」